『あきた豊醸化計画』

～ 秋田市での芸術祭？開催を考えるシンポジウム ～

H28.11.11

【 記録 】

秋田市企画財政部企画調整課

はじめに

平成28年11月11日（金）、「秋田市での芸術祭？開催を考えるシンポジウム」を秋田市川尻にある「高清水『仙人蔵』」で開催しました。

シンポジウムには、市内外から70名を超える方にご参加いただき、本当にありがとうございました。また、素敵な空間を提供してくださった秋田酒類製造さんにも感謝申し上げます。

前半は「パネリストが醸してきた秋田」と題して、パネリストの皆さんからご自身の活動紹介や「芸術祭？」への思いをお話しいただき、後半は「トーク・セッション」として、会場からのご意見やご質問をもとに意見交換するという内容で進めました。

「芸術祭？」と「？」を付けたとおり、そもそも「芸術祭」と言うべきなのか、秋田市で開催する意味は何か、などなど今後も突っ込んだ意見交換が必要と感じられた内容でした。

本紙は、今回のシンポジウムの内容をまとめたものであり、今後皆さんとともに築きあげていく「あきた芸術祭」の第１歩を記録したものです。

※あきた芸術祭？の「?」について
　本当に秋田市で芸術祭なんだろうか？という、スタートためのシンポジウムでしたので、「？」が付いているのはそのためです。

目次

「パネリストが醸してきた秋田」（18:30～20:00）..... 2

価値観が変化している中で、秋田に新しい動きをどうやって作っていくのか.....2

これまでの「まちおこし活動」から･･･（アドボカシープランナー・佐藤裕之氏）.....7

あきたアートプロジェクトは終わらない!!!（美術史家・山本丈志氏）.....13

秋田の魅力、資源、人・・・（のんびり編集長・藤本智士氏）.....21

休　憩 29

参加者からのご意見・ご質問.....29

「トーク・セッション」（20:10～20:40）.....32

トークセッション.....33

「パネリストが醸してきた秋田」（18:30～19:50）

前半は、「パネリストが醸してきた秋田」と題して、パネリストの皆さんが、ご自身の活動を通じて「あきた芸術祭(？)」への想いについて発表しました。

司会・進行には、秋田公立美術大学教授で美術家の藤浩志氏と、同大学の人類学者・石倉敏明氏、そしてパネリストには、アドボカシープランナーの佐藤裕之氏(羽後設備(株)代表取締役社長、(株)ウェンティ・ジャパン社長、NPO 法人トップスポーツコンソーシアム秋田理事長)、美術史家の山本丈志氏(秋田県)、のんびり編集長の藤本智士氏((有)りす代表)をお迎えして進められました…

価値観が変化している中で、秋田に新しい動きをどうやって作っていくのか・・・

藤先生と石倉先生の絶妙なトークからシンポジウムが始まりました。

藤　浩志　氏（美術家）

1960 年鹿児島生まれ。秋田公立美術大学教授。京都市立芸術大学在学中地域社会での活動を志向し京都情報社を設立。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。国際展やアートプロジェクトの現場で地域資源・適正技術・協力関係を活かした活動を実践。NPO 法人プラスアーツ副理事長。十和田奥入瀬芸術祭ディレクター、十和田市現代美術館館長を経て現職。http://geco.jp

石倉　敏明　氏（人類学者）

1974 年東京都生まれ。芸術人類学・神話学。秋田公立美術大学講師（アーツ＆ルーツ専攻）。明治大学野生の科学研究所研究員。共著・編著に『野生めぐり』（写真／田附勝）『人と動物の人類学』『道具の足跡』『折形デザイン研究所の新・包結図説』『タイ・レイ・タイ・リオ紬記（高木正勝 CD 附属神話集）』等。

市	皆様、改めまして本日はお寒い中、この様に大変多くの方から会場に足をお運びいただきましてありがとうございます。 時間となりましたので、『あきた豊醸化計画』～秋田市での芸術祭？開催を考えるシンポジウム～を開催いたします。 それでは、本日の司会進行とパネリストの皆様をご紹介させていただきます。まず、本日の司会進行を務めていただきます、秋田公立美術大学教授で美術家、プロジェクトディレクターの藤浩志様です。
藤	よろしくお願いします。
市	同じく秋田公立美術大学講師で人類学者の石倉敏明様です。
石倉	よろしくお願いします。
市	続きまして、本日のパネリストを務めていただきます、羽後設備およびウエンティ・ジャパン社長で、アドボカシープランナーの佐藤裕之様です。
佐藤	こんばんは。
市	同じく、秋田県文化振興課勤務で美術史家の山本丈志様です。
山本	よろしくお願いします。
市	同じく、のんびり編集長の藤本智士様です。
藤本	よろしくお願いします。
市	それでは早速ですが、藤様、石倉様に司会進行をお願いいたします。
藤	はい、よろしくお願いします。藤です。
石倉	石倉です。よろしくお願いします。
藤	「あきた豊醸化計画」というタイトルで「芸術祭？開催を考える」シンポジウムということで進めるわけですが、近年、いろいろな地域で芸術祭が開かれています。 例えば、茨城県では『茨城県北芸術祭』をいうものを開催しており、私自身それに出品している最中です。埼玉県でも『さいたまトリエナーレ』、瀬戸内では『瀬戸内国際芸術祭』、愛知県では「あいちトリエンナーレ」、あとは••••
石倉	『東京芸術祭』も、今年の9月から始まっていますね。
藤	東京芸術祭。あとほかにも…、というくらいたくさんあります。

石倉	何十もあるかもしれません。
藤	芸術祭と呼ぶ場合もありますし、三年に一回行う国際展のことをトリエンナーレ、二年に一回行うものをビエンナーレ、毎年行うものをアニュアル、あるいはアートプロジェクトと呼んだりもします。秋田には僕らも関わっている「上小阿仁プロジェクト」があったりしますが、あと何があるでしょう？
石倉	『ゼロダテ』というのがありますね。
藤	大館を中心にしたゼロダテプロジェクト。
石倉	2014年には『大館・北秋田芸術祭』も行なわれました。秋田市内では『あきたアートプロジェクト』が続いています。
藤	今まで行なわれてきた既存の地域の活動だけではなく、さらに何か違う考え方や発想で面白い活動を作っていけないかということで、このような芸術祭などアートに関係する様々な活動をつくる試みが始まっているのだと思います。 それで、秋田市としてどのように取り組んでいくのか、ということを考えつつあるところで、この地域で暮らしていく上で、如何にこの地域を素晴らしく、楽しく、充実させていくか、もしくは外の人に対してどのようにその魅力を発信していくのか、その仕組みをどのように作っていくのか、ということなのだと思います。 以前は「活性化」という言葉が飛び交って、何か賑わえばいいんじゃないか、というような風潮もありましたが…
石倉	単純に人が増えればいい、というような発想ですね。
藤	そうです。人が増えればいいとか、そういう時代もありました。ビルが建てばいいとか、交通が盛んになればいいとか。昔の土木の考え方では、土木は地域を豊かにするもので、土を盛り、道を造り、ダムを造り、とやっていたわけですけれども、実はそれは地域を破壊しているんじゃないか？という反省の中で、近年、土木も変わりつつありますよね。様々な人の交流をつくることであるとか、地域特性をつくりだすことであるとか、そのように**価値観が変化している中で、秋田に新しい動きをどうやって作っていくのか**、というところに課題があるのだと思います。 その中で、秋田市がやっている文化行政ですが、4年前に美術大学をつくりまして、実は僕は、秋田公立美術大学の教員として2年前から秋田に来ました。石倉さんはどのくらいになりますか。
石倉	僕は2013年の開学時からです。3年半になりますね。
藤	美術大学というところは、簡単に言うと「作る人」を作るところです。これからの未来に必要な様々な活動を作る人、デザインする人、新しいことを生み出していくクリエータ

	ーを作るために、秋田市の政策として美術大学ができて、その教員として様々な専門性と意欲をもった人が外から集まって来たわけです。 　そして年間100人くらい、外から意欲とセンスをもった学生がやって来ます。秋田県内、秋田市内の学生はもちろんいるんですけれども、7割は県外から来てくれています。 　短大から大学になって今年が4年目ですので、これから卒業生が出てきますが、せっかくここで学んだわけですから、何か今までなかったクリエイティブなことを秋田で実践的にいっぱい作っていただきたい。出て行っちゃうというのは避けたいですね。
石倉	外にですか？
藤	そう。外に行って勉強してもいいんだけど、秋田市の税金で作った大学ですからね。
石倉	たしかに県外に出て行かなければ経験できないこともあると思います。ですが、できれば秋田を活動の拠点とする卒業生や、経験を積んで秋田に帰ってくるような人も出てきてほしいですね。
藤	また帰ってきてほしい。
石倉	そのためには、仕事や活動拠点が必要となってくると思います。
藤	いろんなパターンがあってもいいと思いますが、とにかくいろんな活動を作ってほしいし、その現場を秋田につくることを本当に考えなければいけないと思います。 　今日のシンポジウムの延長にあるような活動が、これからの学生の将来の活動にもリンクすると思っています。
石倉	今日のシンポジウムのチラシには、大きな字で「醸」と書いてありますので、きっと「何だろう？」と不思議に思った方もいらっしゃると思います。先ほど藤さんが言ったように、ここでは活性化という言葉を読み替えて「豊醸化」という言葉を造語してみたわけですね。
藤	そうですね。
石倉	わかりにくいのですが、「豊饒化」ではなく「豊醸化」。「醸」には「かもす」という字を当てています。
藤	そう、「じょう」が「醸（かも）す」です。お酒好きなので。
石倉	「地域活性化」という言葉には、衰退してきた文化を元気にしたり、人口の増大や経済活動の拡大をめざす、というニュアンスがよく込められます。つまり、「今は元気がないんだけれど、いつかまた経済発展を」っていう前提がある。**「豊醸化」とは、そういう右肩上がりの前提を超えて、まったく新しい価値創造をめざすための概念**です。微生物の力で食材が醗酵していくように、根底から何かが変わっていく、持続可能な価値が内

	側から生み出されていく、というような。
藤	そうですね。
石倉	目に見えないところで、ぶつぶつぶつぶつと、何か地殻変動のような変化が起こるということ。
藤	実は何かが動いていると思うんです。**既に秋田の中でもいろんな活動している人はたくさんいますので、それがどういう風な形で繋がっていくのか、豊かに美味しいものになっていくのか**、という形じゃないですかね。
石倉	秋田には豊かな醗酵食品・保存食文化が伝えられていますが、そういったものがヒントになりそうです。アートを社会的な課題解決や経済発展の「手段」と考える硬直した発想を超えて、根本的な問題を問い直して、進歩を促す必要があるんじゃないかな、と思っているのです。 　何年か前に秋田市内で、高嶺格さん・光島貴之さんと「藝術ってなんだすべ？」っていうトークイベントを開いたのですが、秋田公立美大でもそうした「秋田の中で動いている新しい動き」や「アートの根本的な問い直し」が進められています。**秋田はある意味アートの世界の辺境地であるからこそ、支配的な流れから少し距離を置いて大切なことを見つめ直すことができる土地柄なのではないか**、と感じています。そんなわけで、今日は「アートって難しいものだ」って決めつけず、柔軟な視点からこれからの秋田と芸術のありかたについて考えてみたいと思います。
藤	ということで、今日はパネリストに、いろいろな活動をされている方をお迎えしました。 　秋田市内でアートのみならず、新しい活動、おもしろい活動、必要な活動を重ねてきた佐藤様。 　秋田県内でいろんなアート活動を仕掛けてきた山本様。 　そして、のんびりという雑誌の編集長として、本当に秋田の中のいろんな人たちに関わってきた藤本様。 　それぞれの話から、まずは聞いていきたいと思います。もし準備ができましたら、よろしくお願いいたします。

これまでの「まちおこし活動」から・・・（アドボカシープランナー・佐藤裕之氏）

まちづくりの視点から、どういう「コト」があれば秋田が賑やかで楽しくなるのか、これまでの活動内容を通じて語ります。

佐藤　裕之　氏（アドボカシープランナー）

1961 年秋田市生まれ。大学卒業後、東京でのコンサルタント等の経験を経て 1996 年に帰郷。羽後設備（株）、風力発電会社（株）ウェンティ・ジャパン等の経営に携わる傍ら、映画「釣りキチ三平」のコーディネーターや、NPO 法人スポコンの理事長として、千人街コン、雪寄せ大会など、さまざまなまち興し、官民協働による地域自治組織作りに奮闘。現在、「あるもの」探しを通じて、秋田市の観光資源発掘に着手している。

佐藤	皆さんこんばんは。佐藤と申します。 私は秋田生まれで、東京の大学に進学し、卒業後も東京で仕事をしましたが、30歳半ばくらいに秋田に戻って来て約20年になります。現在は、地元で設備工事の会社やら、今ちょっと流行の風力発電の会社やらを経営しているんですが、この20年間で、仕事だけではなく、いろいろな**まちおこし**をやってきました。 **私のまちおこし活動・・・もっと単純に自分たちの街を知ろう** お手元のパンフレットに、私のタイトルを「アドボカシープランナー」という訳のわからないものにしていますが、アボカドのことではなくて、アドボカシーというのは共同とか巻き込んで一緒に何かをやるという意味のようです。 山本さんと藤本さんに対抗して「かっこいいタイトルを付けろ」と言われたので、いきなり考えたタイトルでして、秋田弁で言うと、なんでもやっているので「くされたまぐら」みたいな、ペンペン草みたいな男です。 私が何をやってきたかということを簡単にスライドを作ってきましたのでご覧いただきたいと思います。まず、昨日何をやっていたかということで… 夕方から商工会議所を中心に、秋田の寺町で、あるもの探しをしよう、というワークショップ、フィールドワークをやりました。秋田というのは藩政時代からの町割りが残っていて面白いんですが、意外と皆さん寺町にはお墓があるのでお近づきにならないようです。 歴史的に価値のあるものがどうやら埋まっているらしいので、それを活用して、何かできないかなと思いまして、インバウンドがどうのこうのという視点ではなくて、**もっと単**

純に自分たちの街を知ろうじゃないかと…

お寺も元気になるし、我々市民も元気になるようなものがないものかなあということで、「寺町観光研究」というのをやっています。

では、今年は何をやってきたかということで…

私は「トップスポーツコンソーシアム秋田」という舌を噛みそうな名前のNPOをやっておりまして、スポーツで街を元気にする、ということに取り組んでいます。

ここ数年やっているリレーマラソンという大会は、毎回1000人くらい参加しています。5人以上一組で42キロを走るもので、仮装もOK。とにかく楽しんでもらおうということです。

それから、このスポーツ団体、なんでもスポーツにしてやろうといろいろ取り組んでいます。

横手市と一緒に「雪寄せはスポーツ」だということで「YUKIYOSE 世界大会」というのをやっています。これは結構人気があります。制限時間の中でどれだけ雪かきができるかという単純なスポーツですが、雪は秋田の厄介者ですので、ここから例えば雪寄せの資格制度を作って、悪徳の雪寄せ業者を排除しようとか、そんなことに繋がっていけばいいなということでやっています。結構人気がありまして、観光庁から「若い人に体験させたい旅」ということで一昨年表彰されました。

それから、秋田で川を使ったまちおこしをしようとかですね。これがそのワークショップの様子です。美術大学の向かい側の川辺でいろいろな企画を行って、水辺のオープンカフェとかをやっています。

8年前の写真ですが、私の隣に立っているかわいい御嬢さんは土屋太鳳さんという、朝の連ドラ『まれ』の主人公だった方です。この方がスクリーンにデビューしたのが、『釣りキチ三平』という映画でした。私は地元で『釣りキチ三平』の映画のコーディネーターをさせていただいておりました。一人フィルムコミッションのようなものです。

なんでこんなことをやったかというと、やっぱり、映像の力を信じていたというのがあります。この『釣りキチ三平』は、同時期に上映された『おくりびと』の大ヒットの陰になって、映画としては中ヒットぐらいでしたが、この映画をきっかけにいろいろなことが行われました。

例えば、滝田洋二郎と矢口高雄のお二人による「『釣りキチ三平』を描いた二人のアーティストと秋田の再生」というシンポジウムとか、「釣りキチ三平ぬれ煎餅」とか、川反に行くと釣りキチ三平を記念した「夜泣き谷」というカクテルができたりとか…。今でも「夜泣き谷」というカクテルは頼めば出てきますよ。こういうようなことで、まさに「まちおこし」をしてきたわけです。

一番効果があったのが、三平の家としてロケ地になった五城目町の北ノ又集落でして、誰が数えたか分かりませんが、この映画が上映される前の来訪者は写真愛好家など年間54人だったのが、映画ができて、ロケ地、建物を残したんですが、その結果、年間１

	万人を超えたそうで、それが今も続いているようです。
藤	それはすごい。
佐藤	この映画をきっかけに農家レストランができたり、そこに毎日、町の老人施設の方々がお昼ごはんを食べに来たりとか、そういうことに繋がっているようです。 これが、矢口先生からいただいた葉書き。大変綺麗な字をお書きになる方なんですが、先般は秋田空港にこういうレリーフができたりしています。
藤	知らなかったですね。
佐藤	ええ。こんなことをやったんです。 次に、このシンポジウムは、アートに関するものということで、私がやっていることの中でカッコいいものないかと探したんですが…風力発電の風車の羽って何かカッコいいんですよ。
藤	そうですね。
佐藤	この風車もアーティスティックかなということで、ちょっとご紹介しますが、例えば生協さんと風車を作りまして、昨日から売電を始めたところです。 それから、秋田の酒を中国にこっそり持って行って展示会をやりたいと思いまして、スーツケースに四合瓶をいっぱい入れてこっそり持ち込んだり…
藤	なんでこっそり？持ち込んじゃいけないんですか？
佐藤	本当は持ち込んじゃいけなかったんです。 そして、これは自分の本業に近いんですが、こういう浄水場をやったり、建設業のマッチングサイトもやったりしています。 これは先程申し上げたスポーツの団体で「スポコン」といいますが、スポーツでまちおこしをする団体のHPと雑誌です。この団体でも、いろんなことをやっています。これは東日本大震災から一週間も経ってないとき、皆さんと一緒に募金運動をして、釜石へ2トントラック3台ぐらいで物資を運んだ仲間たちです。それと、スポーツゴミ拾いという活動を通町の商店街と一緒にやったり、スポーツボランティアの団体を作って、大会支援などをやっています。それから、なんでもスポーツにかこつけるということで、婚活もスポーツだということで4回ほど、大町・川反で1000人合コンを企画しまして、このおかげで結婚した方が結構おりました。 後は、秋田にカジノを作ることができないかとか、秋田にウィスキーが作れるかという研究会を立ち上げたりもしております。 私どもの会社で開発中の秋田火力発電所の北側の風力発電所、秋田県の土地を借りてやるんですが、そのコンペで秋田県民歌の新3番を作詞して、披露してみました。「風の松原　いよいよ碧く」と始まってですね、いかに秋田は風が良いか、という歌を作りま

したので、是非歌いたいという方がいましたら、申し出ていただければ差し上げます。
　今日は芸術祭がテーマということで、私がやっている事と芸術がどう繋がるかなと思っていろいろ考えたんですが、私は、商売も市民活動も、ある意味面白さとか遊び心があるからやれているのかなと思います。

人間は元々ホモルーデンスという遊び人

　「梁塵秘抄（りょうじんひしょう）」という中の古い歌に、『遊びをせんとや生まれけむ　戯れせんとや生まれけん　遊ぶ子供の声きけば　我が身さえこそ動がるれ』というのがあります。
　ホイジンガという「中世の秋」で有名な学者がいますね。社会学をやっている方は読んでいるでしょうけれども、人間は元々ホモルーデンスという遊び人だといっています。「遊ぶということが人間は本質的に体の中に埋め込まれている」のであって、その「遊び」というのは、今の自分を別の所に動かしていくこと、言い換えれば日常と非日常を行ったり来たりすることなんじゃないの、なんてことを言っています。確かにそうだなあと思います。まちおこしもそうだし、アートもこういうことなんじゃないのかなと、ちょっと教科書的ですが書いてみました。

日常の中で非日常を体験する

　実は、先程も述べたとおり、私はスポーツのNPOをやっているんですが、2004年頃に「スポーツとまちおこし」ということで講演させていただいた資料がたまたま出て来たので、こちらをご覧ください。
　人間ことホモルーデンスの「遊び」の要素と同じような形でスポーツが定義されていました。スポーツの語源っていうのは元々「ポート」、「港」から出る、という意味で、それはつまり**日常の中で非日常を体験する**というものがスポーツだと。よくスポーツを体育と間違えている人がいて、例えば体育という言葉、これは体を鍛えるという意味で、ちょっとスポーツとは違うんです。スポーツということを考えると、そこに**何か日常から離れて何かを楽しんでまた頑張るみたいな人間のホモルーデンスの本質みたいなものがある**気がしています。なんか今日のテーマに繋がるものがあるかなと思います。
　人間は群れる動物ですので、遊んでいるとクラブというか、集まってくる。遊びにはまって、秋田弁でいうといろいろな団体に「かだっていく」と、また楽しみが増えていく。例えば、まちおこしとかスポーツもそうだし、芸術祭をやろうみたいな運動もそうですが、そういうことをやっていることによって誇り、自信みたいなのが生まれてきて、それが

	共感を呼んで、何か地域の誇りみたいなものになっていく循環というのがあるんじゃないかなと思って書いてみました。 **やっぱり「祭りがある町」というのは絶対に良い** 　バイブルのようにしている本があるんですが、嵐山光三郎というエッセイストが昔書いた「日本百名町」という本で、その中に「良い町の10条件」というのがあるんですね。例えば、「川が流れる」とか、「町並みが美しい」とか、「長老がいる」とか、「よそ者・若者がいる」とか、「おばさんが元気なオバタリアンの町」とか、なぜか「酒と料理がうまくて蕎麦屋と宿があって、豆腐がうまい町が良い町」だとか書いてある。その中に**やっぱり「祭りがある町」というのは絶対に良い**とある。祭りがあるということは、住んでる人が自分で自信を持っていたり、そこに外から来た人が集まったりということなんだろうと思って、それをアートという切り口で芸術祭にもっていけば、何か面白い取り組みができるんじゃないかなと思っています。
石倉	ありがとうございます。佐藤さんの多岐に渡る活動のなかから、「日常」と「非日常」を往復する活動の輪郭が見えてきました。日常という次元は、ある意味ではお祭りのように非日常の次元を通して、初めて見えてくるところがあります。かつては厳粛な神事とその後の祝祭が一体になっていました。ところが、最近は、神事のような「人間を超えたもの」を置き去りにした賑わい創出イベントや、祭りの精神を忘れた「フェスティバル」も多いですよね。 　佐藤さんが説明して下さったように、スポーツにも本来はただ身体を鍛えたり、健康のために身体を動かすというだけではない、「非日常」や「お祭り」に関わる部分があったのではないか、と思います。それこそがホイジンガの言う「ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）」の根拠でもあります。本来、芸術の一番深いところとつながっているはずなんですね。
佐藤	学生時代、スポーツ社会学というのを取ったんです。なんかわからないけど面白かったんですね。早川武彦さんという先生に、急に指を差されて「君、体育とスポーツの違いを言え」って言われて答えられなかったんです。
石倉	言葉の定義によりますね。
佐藤	そう、分からない。「スポーツと体育は違うんだ。日本はごっちゃに使っているよね」ということから先ほどのような話をされて、それでずっと考え続けて30年になります。
石倉	なるほど。

藤	例えば、今若い人たちの表現のフィールドを考えてみると、アニメの中とか、2次元の中とか、デジタルメディアの中とか、ちょっと前の時代には存在しなかったフィールドだったりします。 30年前に「アート」と呼んでいたものと、**今僕らが「アート」って呼んでいるものと、次の世代が「アート」って呼ぶものは、多分変わってくる**と思うんです。 そういう意味では、もしかしたら将来的にはスポーツとアートっていうのが、逆転している可能性もあります。どうなっていくのかなんて実はだれにも分からないのだと思います。 それでは、次に山本さんにこれまでの活動を紹介していただきたいと思います。お願いします。

「あきたアートプロジェクトは終わらない!!!」（美術史家・山本丈志氏）

これまで県内のアートプロジェクトを支援してきた視点から、「アキタミュージックフェスティバル」や「あきたの美術」について紹介します。

山本　丈志　氏（美術史家）

1961 年北秋田市生まれ。高校教諭、学芸員を経て、県文化振興課に勤務。主に秋田蘭画、近現代の秋田の美術を研究。2014 年から、あきたアートプロジェクトで開催されていた「あきたの美術」展、秋田県若手アーティスト育成支援事業に携わる。2015 年第 6 回日経日本画大賞展推薦委員、2016 年 VOCA 展 2017 推薦委員を務める。

山本	秋田県文化振興課の山本です。よろしくお願いします。 実は今回のシンポジウムには乗り気じゃなくて、秋田市の担当者にお会いしたときに何度かお断りしたんです。というのは、私は秋田県職員ですので、立場上申し上げにくいことがあると思いまして。特に、これからお話しする「あきたアートプロジェクト」というのは、私が所属する秋田県文化振興課が担当していた事業でもありますし、傍で見ているのと、中で見ているのでは、全然立場が違います。なかなか言えないこともあることを、あらかじめ皆さんにもご承知おきいただきたいと思います。 「あきたアートプロジェクト」について、学芸員として仕事をしてきた立場から、もしかしたらこうしていけば良いのではないかなということを踏まえて、お話ししたいと思います。 ちなみに、お集まりの皆さんは「あきたアートプロジェクト」をご存知ですよね。
藤	どうですか？「あきたアートプロジェクト」を知っていますか？ ご存知ない方もいらっしゃいますね。
山本	これから、「あきたアートプロジェクトは終わってない!!!」ということを強調してお話しを進めさせていただきますが、「あぁ、こんなのあったな」と皆さんも知っていることが出てくると思います。 **活動を振り返る・・・あきたアートプロジェクト（2011～2015）** 2011 年から旧県立美術館を会場にして鴻池朋子さんがプロデュースをした形で**「東**

北を開く神話」が開催されています。この「東北を開く神話」第一章、第二章は、最初の方の目玉だったと思います。確か、第三章は千秋公園全体を使った、アートプロジェクトでした。これは美術展というより、いろいろな演劇集団とか、踊りを踊られる方のブースを作って催されていたようです。

私はこのときはまだ県立近代美術館にいましたので、部外者として、本当に展覧会として見せていただきました。秋田でもこれだけ大きなプロジェクト、展覧会というものができるんだ、と感心しました。特に、旧県立美術館は新県立美術館の県民ギャラリーにあたる、いわゆる貸しホールという状態でしたので、壁に作品を掛けるという美術館のような展示ではなくて、その会場を現代アートという、フロア全体を使うというような形で展覧会をされていました。内容はかなり混沌とした様々なものが並べられていて、びっくりしたのを覚えています。それが2年続けて行われました。

そして、新県立美術館を使ったプロジェクションマッピング「秋田幻燈夜」というものも開催されました。

私が県文化振興課に異動になった2014年には、隣にいらっしゃる藤本さんがプロデュースなさった「池田修三展」。それから「佐竹本三十六仙絵巻の模写展」もやりました。昨年は、「ナンセンスマシーンズ展　明和電機」という現代アートのかなりメジャーどころの展覧会を新県立美術館のギャラリーで行いました。

これがすべての展覧会というわけではありませんが、大きなところで行われたのはこういう感じです。

2014年には、先ほどの二つの展覧会と「あきたの美術2014」、それにプロジェクションマッピング、それから「宿命の交わるところ」という一種変わった、ポルト・B によるアートプロジェクトが加わりました。

昨年は、「池田修三展」、それから「あきたの美術2015」「明和電機」という形で行いました。

あきたアートプロジェクト以後（2016～）

この「あきたアートプロジェクト」は、「秋田市の中心市街地を活性化する」という目的があり、実行委員会の形式で行われていて、会長がたしか広小路商店街の方だと思います。それに県と市が助成するような形で行われていました。

一応、昨年でこの事業は閉じることになりましたが、実は秋田県の事業では「あきたアートプロジェクト」という名前は残っていまして、実際に「上小阿仁プロジェクト」「ゼロタテ」、それから「秋田ミュージックフェスティバル」があります。さらに、私が担当している「若手アーティスト育成支援事業」というものもあります。主に助成という形の事業になります。

	「秋田ミュージックフェスティバル」（通称AMF）は、県立美術館前のにぎわい広場を中心に行なわれている音楽イベントで、美術に関わる方々はあまりいらしていないですね。AMFは、「秋田ブラスフェスタ」（通称ABF）と「パワーオブミュージックフロム秋田」（通称PMA）という2つの団体が共同でやっています。ABFの方はブラスバンドを主体とした、ストリートミュージックのイベントです。AMFは規模的にはかなり大きくて、野外で行う音楽イベントとして、これ程大きなものは非常に珍しいそうです。 このイベントのポスターは、きくち正太さんという、大森出身の漫画家にここ3年間続けて描いてもらっています。
藤	これは毎年やっているんですか？
山本	6年目になります。
藤	6年目。今も継続中ですか？
山本	はい、継続予定です。予定というのも、実際には資金が結構かかりますので、秋田市と秋田県がかなり助成をしております。 **「秋田は恵まれ過ぎている」** 今年の9月3日、4日にAMF開催に合わせて、全国でストリートミュージックフェスティバルを行なっている団体が集まり、全国的なネットワーク、組織を作り、お互いの活動の情報交換をしようと全国会議が開かれました。その時、**「秋田は恵まれ過ぎている」**という話を聞いて、AMFの皆さんは愕然としたそうです。著名な音楽イベントを差し置いて、助成金を一番貰っているのが秋田だったということなんですね。**他はボランティアでやっているところが多く**て、県や市の助成が数十万単位だそうですが、AMFの場合は、今年、秋田市と県で200万ずつ計400万を助成しています。そんなことで、これからのやり方を考えていかなければいけないということと、現実的にボランティアでそういうことができるんだということをちょっと考えていただいて…
藤	舞台とか相当大きいものを作っていませんか？
山本	そうです。それにやっぱり一番お金がかかっています。というのは、街なかで少人数編成でやる場合には舞台とかいらないですが、ブラスバントということで大人数、30人から50人くらいの編成が出てくるものですから、そのためにこういう形でやっています。 このAMFには、ウェルカムナイトとグランドフィナーレという二日間の夜の部がありまして、基本的には秋田県、秋田市出身のプロミュージシャンを呼んでいます。昨年は

	趣向を変えて、**「いろんな方に来ていただきたい」**、**「集客数を増やしたい」**ということで、EPOさん、南佳孝さんをゲストに迎えました。ちょっと年齢層が高かったですが、お客様はかなりたくさん集まりました。それから、UKジャズダンサーの鈴木祥高さんも飛び込みで出演されています。 　そして、私が担当している美術展ですが、「あきたの美術」という展覧会をつい先週まで県立美術館の方で開催しておりました。この美術展は原則、県の単独事業で行われてきたもので、昭和34年に始まったものです。ところが「あきたアートプロジェクト」に付随するようになって、予算もそちらに編入されました。その際に、他のイベントでかなりお金がかかったようで、「あきたの美術」に関しての予算が激減していました。その状況が過去数年続いていました。今年も何とか開催はしたのですが、いろいろな方々に迷惑をかけながら…**ほぼボランティアのような形でご参加いただき、何とか開催できた**という感じです。
石倉	音楽の方はあまり変わらない予算。しかし「あきたの美術」の方は予算が減っているということですか？
山本	美術の方は「あきたアートプロジェクト」に組み入れられた時にバサッと予算を削減されまして、AMFなどのような他の新規事業の方にどんどん予算が回されました。 　「あきたの美術」に関しては予算が 1/10。はっきりいうと会場借用費とポスター等の印刷費しかなかったです。
石倉	配分の問題なのですね。本来別々のものを目指しているのに、同じ枠のなかで競合してしまっている。
山本	大きなプロジェクトをやることになって、様々なイベントが重なった中で、予算が配分されていったんだと思います。
石倉	なるほど。それは全然気付きませんでした。地道な人材育成よりも、派手なイベントの方に予算が配分される、というパターンはよくあります。
山本	いずれ、大きなイベントやプロジェクトを立ち上げる際には、恐らくですが、いろいろな細かいイベントがたくさん出てきて、力関係じゃないかなと思います。そういうところで予算の配分が決まってくる。取り合いになる感じがしています。
石倉	なかなか難しい問題ですね。

山本	いろんなイベントが重なると、様々な分野の方が参入してくるのでそうなります。 今年も「あきたの美術」は何とか開催はできたのですが、今のところ私が考えているのは、展覧会としての体裁といいますか、最小限のことを何とかしていかなければいけないなということで、**限られた予算の中で、いろいろ相談しながら、ご厚意をいただきながらやっていくしかない**という感じです。 **展示環境の改善に向けた取組** 特に気になったのは、2013年、私が文化振興課に来る前ですが、アトリオンを会場にした展覧会です。パッと見で皆さんは何とも思わないかもしれません。作品の目の前、人が立つ位置のあたりに彫刻が並んでいるという状況は、普通に考えると展示環境としていったいどうなんだろうと、私は思いました。
石倉	今の基準からすると、アトリオンは非常に使いにくい空間だと思います。しかし、この時代の方が恵まれていた、予算があったということですか？
山本	もうなかった時代です。たぶん予算が削られていると思います。 皆さんもたくさん作品が見られるから問題ないと思われるかもしれませんが、一点一点の作品をご覧に入れる状況ではないと私は感じました。それを少しでも是正できないかと取り組んできました。 これは2014年の会場です。この時は国民文化祭がありまして、いろいろな展覧会やイベントが数多く秋田市や秋田県内で開催されたと思います。この時は、新県立美術館とにぎわい交流館AUを借りられたので、なんとか作品を振り分けることができました。おかげで前の年よりはかなり整然と作品が並ぶような形になって、一体一体をきちんとご覧になれたんじゃないかと思います。 ただ、見ていただくと何となくぼやけている感じがあると思います。それは施設の問題で、にぎわい交流館AUでも新県立美術館でもそうなんですが、スポットライトの絶対数が足りないんです。展示施設に関する意識の違いと言いますか、なかなか展示環境にご理解いただけなく、会場を使う度にスポットライトの数を増やしてくださいと言い続けるしかありません。少しずつ増えてはいるようですので、できれば皆様、ご利用になる方々が一言「スポットライトが足りない」と言ってくだされば…
石倉	展示空間の整備やキュレーターの活動への支援は、秋田は東北各地の成功例に比べて本当に遅れてしまっているように感じます。今日、ここに来ている皆さんが、今後施設のアンケートに意見すれば切実さが伝わるかもしれません。参加された皆さんは全員「スポットライトが足りません！」と書いてください。切にお願いします！（笑）

山本	アトリオンの方にも実際に予算をつけていただき、少しずつ購入する手配になっていますが、まだまだ十分ではないと感じています。 それと、新県立美術館の使い方ということで、いろいろ考えながら試行錯誤しています。**展示施設というのは必ずしも全て使い勝手が良いということではない**ので、その使い勝手の良くないところをどうやって利用していくかというのが多分、私の仕事といいますか、学芸員の仕事だと思っています。そういう点について、実は秋田県の意識が低いというか、アーティスト自身も、例えば学芸員、キュレーターの必要性というものを、あまり認識なさってない方々がいらっしゃる。そういう意味でわざと県立美術館の使いにくいところを意識して作品を展示するようにしています。 ご覧になった方々がどういうような反応をしてくださるのか気になるところではありますが、概ね「あきたの美術」において行なっている分には、なかなか皆さん、「面白い」、「いい展示ではないか」と仰ってくださる方がいらっしゃいます。これは昨年のものですが、だいぶ整然としたかなという気がします。 **アーカイブ（記録保存）の必要性** やらなければならないこととして考えていることが、もう一つあります。実は「あきたの美術」の名称になる前、「秋田県現代美術展」をやっていたときは、毎年、展覧会のカタログを作っていました。これは、秋田県の**アートを皆さんにご紹介するだけでなく、何でこういうことをやっているのかを記録として残すこと**なんですが、これがとても大事なことなんです。展覧会というのは、開催して終わりではなく、その後いろいろな形で振り返られて、出品されたアーティストの方々がどういう活躍をなさってきたかということも見えてくるわけです。そういうものを記録として残すにはどういう形が一番いいのか、電子媒体で残してもほぼ見られないという方々がまだまだ多いので、今のところはやはりカタログが一番いいのかなと思います。そういう意味ではカタログのような記録を作ることが必要ではないかと私は考えます。 それで、先ほどお話ししましたが、アートプロジェクトに編入される中で「あきたの美術」は予算がどんどん削られていって、カタログを作る予算がなくなっていたのです。何とかしなければと思って、昨年から予算を担当している方にいろいろ相談して、お金を捻出していただき、本当に粗末なものですが、単価 200～300 円で作ることができました。これだけでも少しは展覧会のためになると思っています。問題点ばかり挙げればキリがないですが、それを逆に考えていけばいいのかも知れません。 「秋田ミュージックフェスティバル」については先程も言ったとおり、吹奏楽のビッグバンドの野外演奏としては非常に珍しいということです。これは秋田の方に聞いたのではなくて、他県から訪れたお客様から聞いたことです。それから、全国のストリートミ

ュージックフェスタに関わる方々が、秋田のロケーションが素晴らしいと。ミュージックフェスティバルをやるのに非常に良い環境にあると仰ってくださいましたので、これを活かす方法を模索したいと思います。そういう機会が昨年あったということで、ミュージックフェスティバルについては、何かこれから進む方向性が見えてきたのではないかと思っています。

アーティストを支える人たち、人材の育成が必要

「あきたの美術」については、国内外で活躍するアーティスト、そして**今後活躍が期待される若手が県内にいることは間違いない**わけで、それを上手く活用しきれてこなかったというのが、この展覧会の欠点ではなかったかと思います。もう一つ突っ込んで考えると、アートプロジェクトを運営するディレクター・キュレーターの指導者がいるんですが、そういう方々を活用しきれなかった。そうでなければ、そういう方々の育成がなかなか上手くいっていなかったということだと思います。

少しずつですけども、**ジャンルにとらわれないアートを楽しんでいただけるようにしたい、享受したいという方々は増えています。そういう方々をなんとか仲間に引き入れていく必要がある**のではないか、そういう意味では私たちがやっていかなければいけないことは、見えている気がします。

できれば、秋田市内とか県内とかいう視点ではなくて、もっと広い視野を持った高質な事業を展開できれば、外から見て「あ、これは」というようなものになっていけさえすれば、全然問題なくプロジェクトは完成できると思います。

たまたま、今回「あきたの美術」展を開催したとき、午前中なのですが外国のお客様が非常に多いと感じました。中国か台湾、英語だったからおそらくアメリカなどの方も。やはり、外国人観光客は、非常に興味を持っていろんなものに接しようとしています。もしかすれば、こうした観光客への広報、情報提供は上手くいっていないと思います。

今、私が個人で「こうした方がいいだろう」、「こうすべきではないかな」というようなことを持ち込んだのは、さきほどの「若手アーティスト支援事業」という、アーティストに展覧会等の発表会場を与える事業です。その取組の中で、プロデューサー・ディレクター・キュレーター志望の方をボランティアで集めて、展覧会をつくるという作業を一緒にやっていただいています。こういうことを続けていかないと、大きなアートイベント、プロジェクトは多分成立しないのではないかと思います。これからやっていくことは、「お金を集めてこういう企画をやっていきますよ」ではなくて、それをやるための**人材をきちんと育成して、それが1年、2年ではなく、5年、10年先のことを見越したうえで準備していくこと**ではないか、と思います。

	残念ながら、秋田県と秋田市がそういうことにきちんと目を向けているのか、私には判断できませんが、できればそういう形で、ただ単純にアーティストを支援すればいいだけではなくて、**アーティストを支える人たちも育てていく必要がある**ということをお話ししておきたいと思います。以上です。
藤	はい、ありがとうございます。 展覧会を開催するに至るまでには、いろんな要素があります。それをいかに様々な人と共有できるかということが本当に重要だと思います。キュレーターを育てるのもそうなんですが、マネジメントができる人材をどう作っていくのかということが重要です。 例えば、地域にはいろんな素晴らしい作家がたくさんいます。作家じゃなくても面白い活動をしている人は数多くいるんです。**地域には活動のタネのようなものが無数に眠っている**のですが、それがちゃんと見えるためには、それがちゃんと芽吹くためには、マネジメントする人、キュレーターとか、プロデューサーとか、そういう視点が必要です。そういうことがないと、なかなか活動が出て来ないのだと思います。
石倉	美大でも、一年生に展覧会を見に行った感想を聞くと、「面白かった」とか「面白くなかった」という感想が帰ってくることがあります。単に消費の側にまわってしまう。ところが、実際作る側になってみると、難しさも見えてくる。活動資金がどこから来ているんだろうとか、誰が設置しているんだろうとか、この美術館の設計はなんでこんなに展示しにくいのだろう、というように、いろんな矛盾に気付くようになります。楽しみもその中にある。そういう当事者としての視点が必要なんだと思います。
藤	そういう意味では、**ここにおられる方皆さんが作る側になり、作るプロセスを生活の中にとりいれて楽しんでいくことで秋田は随分と変わってくる**のだと思います。 では、藤本さん、お願いします。

秋田の魅力、資源、人・・・（のんびり編集長・藤本智士氏）

県外在住者の視点から、フリーマガジン「のんびり」の取材を通じて見つかった秋田の魅力、資源、人について語ります。

藤本　智士　氏（のんびり編集長）

1974 年兵庫県生まれ。編集者。有限会社りす（Re:S）代表。編集執筆を担当した『ニッポンの嵐』など手がけた書籍多数。著書に『ほんとうのニッポンに出会う旅』（リトルモア）、編著として池田修三作品集『センチメンタルの青い旗』（ナナロク社）、イラストレーターの福田利之氏との共著『BabyBook』（コクヨ S&T）など。編集長を務めた秋田県発行のフリーマガジン『のんびり』をまとめた書籍を 2017 年刊行予定。

藤本	藤本です。よろしくお願いいたします。 僕は「編集者」という仕事をしていて、普段は兵庫県の西宮というところに住んでいます。いわゆるよそ者なので一番しがらみなく、自由なことを言える立場かなと思っています。 **そもそも「芸術祭」やらなあかんのかな？** そういうことで言うと、そもそも**「秋田市で芸術祭やらなあかんのかな？」**と疑問に思っています。大前提として、「やる」っていう前提でこういう会があるのかもしれないですが、ちょっと聞いてみたいんですけど、「秋田市で芸術祭やった方がいい」と思う人は、今どれくらいいらっしゃいますか？ だいたい…1/5 くらい？ 多分そういう感じで、あとは、そもそもどうなんだろうという疑問があったりするんじゃないかと個人的に気になったので、聞いてみました。 自己紹介すると、「りす」というのが僕の会社名ですが、もともとそういうタイトルの雑誌を作っていたんです。「Re:S」と書いて「りす」、と読ませるんですけど、下に小さい文字で「新しい〝ふつう〟を提案する」って書いています。スタンダードを〝ふつう〟と訳して、とにかく新しい〝ふつう〟を提案していくみたいなことをテーマに雑誌作りをしていました。 例えば、2007 年に出した「Re:S」の4号目の特集タイトルは「地方がいい」だったんで

す。もう十年くらい前になるので、その頃に「地方がいい」とか言ってもあまり世間には響かなかったですけれども、今はもう当たり前に言われます。ですので、僕はもともとそういう風に思いながら編集という仕事をしてきたんです。

「秋田にいてもこんなことが出来るんだ」

こういう出版に関わる仕事をしていると、基本的にみんな東京に行くんですが、僕は兵庫県、関西にずっといながら、それでも全国へ発信していけるんじゃないかと思いながら活動してきたので、言わば秋田の人たちとあまり変わらないと思うんです。一地方からモノを言っていく、それも全国へ向けて言っていくということを、ずっとしてきたと思っているので、秋田県とのご縁の話をし出すと長くなるので言いませんが、その後に「のんびり」というフリーマガジンの編集長をさせてもらうという流れになりました。

「のんびり」は、いわゆる紙メディアで、皆さんにも今日は 16 号、最終号をお配りしているんですが、2012 年から丸4年やらせてもらいました。これは秋田県に来てほしい、とにかく県外の人に秋田に来てもらいたいというもので、実際来てくれる人を増やしていくということが、ある種の使命、ミッションです。そういう媒体として作っていたので、47 都道府県、北海道から沖縄まで全国で配布していたフリーマガジンです。

こういう立派な、カラーでしっかりした雑誌なんですが、これが無料ということもあって、ツイッターなんかを見ていると、各地で争奪戦になってくれたりとか、いろいろ話題になってくれたおかげで、結果として 4 年間もやっちゃったんです。

そもそもこれの役割としては、秋田の編集者、秋田のライター、秋田のデザイナー、秋田のカメラマン、そういった人たちが自分の視野を広げて、**秋田にいてもこんなことが出来るんだ**、というようなことを、僕自身、みんなに伝えたいという思いがあってやっていました。「のんびり」冒頭の目次のあたりを見てもらえばわかるんですが、僕の拠点は兵庫県ですし、表紙は浅田政志くんという、木村伊兵衛賞という、写真家の芥川賞みたいなものを受賞しているような東京の写真家に撮ってもらったりというように、東京ベースで全国的な仕事をしている県外の人たちが半分、残り半分が秋田のクリエーターで、その両方が一緒になって作るということを大事にしてきました。

そういう風に作っていくことで、例えば、ここに「こまち」が表紙の「のんびり」5号目がありますけど、ああいうのも写真家の浅田政志くんと僕が「こまちメチャメチャかっこいいから、あれで表紙撮ろう」とか言うわけです。で、「秋田は酒が美味いから、色々な蔵の杜氏さんに来てもらって、有名な小野花子さんに来てもらって、歌ってもらって、周りでみんなで宴会してワーッと盛り上がって、新幹線まで酔っぱらって真っ赤になっちゃった」っていうような適当なことを言うんです。

ちなみにこれ、合成ではないんですよ。毎回合成だと思われるんですけど…。本物の

こまちの前で撮らなきゃならないわけで、これを実際に手配せなあかんのは、秋田のメンバーなわけですよね。県外の僕たちが好き勝手に「こんなんやったらええやん！」って言うんだけど、実際にやらなきゃならないのは秋田のメンバーだから「いやいや、何言ってるんですか、JR、酒…無理です、無理です」と、もっともなことを言うわけです。やっぱり秋田のみんなは賢いから。

まあ、それはそうだなと。でも県庁の媒体だし、圧かけられへんのかと、冗談交じりに言うてみたりして（笑）。「一回当たって砕けろで、やってみぃなぁ」というようなことを言って帰るんです。で、神戸に帰ったら「のんびり」の秋田のメンバーから電話がかかってきて、「藤本さん、JR東日本、全面協力出ました！」と、「よっしゃ！」みたいな。

ちなみにこのあいだ僕、JR西日本さんと打合せしてきたんですが、その打合せの場でこの「のんびり」の表紙の写真を見せて「秋田でこんなことやったんです」って言ったら「ウチじゃ絶対無理です」と。（笑）

まあ、そういう奇跡が起こるわけですよ。端からできないと思っちゃうんですね。でも、やれるんですよ、意外と。「これが最高だ」って思うんだったら、そこをやればいいんです。そこにアプローチすればいいというようなことが、すごく地方には大事だと思います。そういうことも含めて、「のんびり」は**地元のクリエーターと一緒になって作っていこうという思い**でやっていました。

「すごいですよ、これ！」がたくさんある！

それと、もう一つ。やっぱり僕はよそ者なので、秋田と言えばすぐ思い出すような「なまはげ」とか、「きりたんぽ」とか、そういうものを僕がわざわざ取り上げ出したら、よそ者は何を言われるかわからないですから、そこの経済には触れません、と。

せやけど、**皆さんが普通だと思っているようなことが、県外の人間にしたら「すごいですよ、これ！」と思うようなことがたくさんある**ので、そういうものを取り上げていきます、と。その先に経済が生まれるならば、それは今までになかったものがプラスオンされるわけだから、みんなどんどん活用してください、と。

というようなスタンスで「のんびり」というのは 4 年間 16 号出してきたんですが、そういう中で、さっき山本さんにもご紹介いただきましたけれども、一つトピックになったのは、池田修三さんという一人の作家でした。

当時「のんびり」をやる前から秋田に来たりしていたんですが、友だちの家に泊めてもらったら、この絵が飾ってあったんですよ。

これを見て最初はかわいいと思っていて、だけどやっぱりその目の影とか、この独特の雰囲気に惹き付けられ始めると、「この子、何考えてるのかな」とか、だんだん思うようになり、そのまま、これ秋田っぽいなと思ったんです。最初はかわいいなと思っていたけ

	ど、日照時間も少ないから自殺率もナンバーワンとかいうし、冬は正直厳しいし…。そういう辛さみたいなことや、その先の強さみたいなものも感じたので、これは秋田っぽいなと思ったんです。 　それで、聞いてみれば秋田の人だと言われ、池田修三という名前で、仁賀保の人だと教えられた時に「ほらやっぱり秋田の人だった」と。それでテンション上がっていろいろ周りに聞いたら「うちにもあります」とか「実家にありました」とか、もっと言うと「新築や結婚、子どもの誕生のお祝いにあげたり、もらったりしました」と。 　僕も若いときにはいろいろな展覧会をプロデュースしてきたんですが、そのときの自分のモチベーションは、自分と同世代の作家たちがいろいろ絵を描いたり、ものづくりをしているということだったんですけれども、それを日本人は買わないんですよね。みんな「いいなぁ」と思っても、そんなに高くないのに家に買って帰るという発想にならない。買えばいいのにと思ったけど、やっぱりみんな買わない、というところと一生懸命戦っていた 20 代から 30 代前半くらいがあって、秋田ではそういうことができてるんだ、と。これはすごいことなんじゃないかなと思って掘り下げていったのが、この人を特集で取りあげた「のんびり」の 3 号目でした。 　そこからやっぱり「のんびり」は一応全国に配布されているので、いろんなところで反応をいただき、聞けば聞くほど、例えばこの写真のように「秋田の人たちは、秋田相互銀行の通帳に使われてたから印象があるんです」とか、やっぱり染みついてるものなんだというのが良く分かってきたんです。 　だけど、銀行の通帳に使われるって普通はスヌーピーとかメジャーなキャラクターの領域ですから、この絵を描いている人もきっと有名だと思い込んでいるんですね。それで「いやいや知りませんよ、こんな人、聞いたことないです」、「だけどめちゃめちゃかわいいですね」みたいなところから、どんどん掘り下げたわけです。 　実は、一番最初に池田修三を大々的に取り上げたのは大阪なんです。大阪の HEP HALL という商業施設の阪急阪神グループのホールがあるんですけど、そこで予算を出していただいて、この人の一番大きな展覧会をやりました。そのときに、にかほ市の地元の人とか、池田修三さんの著作権を管理してくださっている池田家の皆さんとか、地元のいろんな人に大阪まで来てもらったんです。ホールの扉を開けて、池田修三の世界がパーッと広がる姿を見て、皆さん、「うわぁっ」て声をあげてくれて…。その瞬間に「これ地元に欲しくないですか？」「欲しいです！」と。 　というのは、僕は地元にこの人の記念館があればいいなと思ったから、でもそれはよそ者の僕だからこそ、かえってイメージが湧くんですけど、地元の人たちはわからないわけです。だから僕が自分でカタチつくらないとなかなか分かってもらえないんですよ。 　そういうことで、最初に自分のフィールドである関西でこういうのをやったり、さらに山口・島根・福岡・新潟とか、東京でもやりましたし、山形や宮城でも…。自分の小さい車の後ろに修三さんの作品乗せて、自分で搬入して、作品集を売って、トークショーをして、搬出して帰ってくる、というようなことをやって、日本全国回ったんです。そうやって、ほかの

所でも修三さんはちゃんと反応がありますよとか、もちろん修三さんを広めていくことも含めて、**自力で、予算なんてゼロで、自分の持ち出しで、ずっとそれをやりました。**

大衆に響くことが大事

そういう風に最初は**やらないと分かってもらえない**し、僕はそもそも予算ありきから始まることというのは、どうなんだろうと思っているんですよ。予算がどうのこうのというよりも、こういうことをやりたいという衝動があって、だからこのことを伝えたいと頑張るヤツが一人いたら、それがある種のカタチになり、そのことについてようやく気付くのがだいたい役所なんです。そういう風にやってから、それから応援してくれたらいいんです。僕は、そういうのが役所の人たちとの一番いい付き合い方じゃないかなと思っているのがまず根本にあります。

最近やったことでいうと、「いちじくいち」というイベントをやったんです。これは9/24-25、ついこのあいだですね。仁賀保には、北限のイチジクといわれているイチジクがあって、皆さんそうだと思うんですが、秋田の人って、イチジクは甘露煮にするじゃないですか。僕が普段関西で食べているイチジクは、甘露煮なんてしないんですよ。もっと言うと、実は種類が違うんですね。品種が違う。僕が食べているのは「ドーフィン」という品種で、まっかっかで、もっと玉ねぎみたいに大きくて、完熟したものを皮を向いてガブッと食べるのがイチジクなんですよ。なので、秋田に来てイチジクを見たときに、なんでこんな青いうちにもぎ取るんだろうと不思議で仕方なかったんです。だけど、修三さんのことで仁賀保の方の家にあがらせてもらったりすると、だいたいお茶と甘露煮が出てくるんです。味が家によって全然違うし。それで、これ面白いなと思ったんです、よそ者として。酸っぱい酢が入っているものもあるし、「俺これ大っ嫌いだ」と思うものも正直いっぱいあるんです。だいたい甘いんですよ。年配の方が作られるものってみんな甘いから、もうちょっと、ホンマにしんどいなって…。どっと疲れるくらい。1個食べたら寝込むわっていうくらい甘いヤツもあるんですけど、そういうのも含めて面白いなと思っていたわけです。

池田修三は「アート」じゃないですか。おかげさまで例えば山本さんにいろいろご協力いただきながら美術館でやらせてもらったとき、国民文化祭というタイミングだったこともありますが、9日間で 12,000 人来てくれました。「池田修三だから、それは人が来るだろう」とか気軽にみんな言われるんですけど、来ないんですよ、普通は。来ないけど、来るための努力をしているんです。

この「いちじくいち」とかも、やっぱりアートというジャンルだけで仁賀保という町は盛り上げられないなと思ったので、食文化が必要だな、と。象潟の牡蠣とかいろいろあるけ

れど、僕はイチジクが一番いいんじゃないかなって。イチジクの甘露煮って道の駅とかで売っているけど、今時そんな糖度が高くなくても冷蔵庫や冷凍庫があるから保存食みたいなことじゃなくていいし、もうちょっと甘味抑えてビン詰にして「イチジクのコンポート」って言ったら、いきなり女の子が欲しくなる感じになるじゃないですか。そういうものが、僕にとっては編集ということなんですね。

そういうようなことも含めて、イチジクっていうのはポイントになるんじゃないかというところから「いちじくいち」というイベントをやってみたんです。池田修三さんだけではなかなか動員が難しいので、食というところに絡めようと。会場をいろいろ探したんですけど、「小出小学校」という、去年廃校になったばかりの学校があって、廃校になるくらいですから、めちゃめちゃ辺鄙な所にあるんです。当然車でないと行けないですし、だけどロケーションが大事かな、とか。やっぱり今どきなのでインスタグラムにアップして欲しいわけです。それで、どんどん拡散していただきたいので、そういう意味では環境とかロケーションというのはすごく重要なので、何よりもそういうことを大事にして小出小学校という辺鄙なところでやったんです。

2日間で 1,000 人というのを目標にしたんですが、フタあけたら 5,000 人来てしまったんです、この辺鄙なところに。2 キロ先まで渋滞を巻き起こして、先の交差点でうちのスタッフが皆「すいません！」って謝って、100 台くらい帰ってもらい…。みんなあぜ道に路駐しまくるから、警察にこっぴどく怒られて…。2日目の朝、イチジクを買い求めに、500 人の行列がオープン前に並んだのを見て、本当に逃げようかと思いました。これはまずいな、ちょっと来すぎたな、と。

そういうふうに、僕はやっぱり、**伝えたいことがあって、それがきちんと大衆に響くっていうことがすごく大事**だと思ってるんです。

だから修三さんのもアートという文脈であり、ジャンルであるんですけれども、僕は、あの人がやっている木版画という日本独特の文化に注目しているんです。東北というのは、棟方志功とか、特に秋田には勝平得之さんという方がいらっしゃって、そういう木版画そのものの良さみたいなことをちゃんと知らしめたいとか、自分なりのビジョンがいろいろあって、それを大衆に届けたいんです。そこがやっぱり僕の中のポイントです。僕、最高のアーティストはビートルズだと思っているんですけど、やっぱり**革新と大衆性って、行ききったらどこかで両立すると思っている**んです。そういうことを目指さなくていいようになっている感じというのが、なんか自分の中では物足りないんです。それで、自分がやることに対する「アート」というところは、そういう大衆性を気にしたいんです。動員数は一番大事ではないけれども、ちょっと大事にしながらやりたいなと思って、いろいろ活動しています。

街にあるものに「編集」という視点でアプローチ

	最後にちょっとわかりやすい事例として、この写真、これは「天使の寒天」というネーミングで、秋田名物とか言っているんですけども、秋田の母さんが作っている寒天です。秋田の皆さん、秋田の母さん方は何でもすぐ寒天で固めるって言っていて、本当かなと思っていたんですけど、スーパー行ってサラダ寒天を見て、本当だなと。あんなの、もうワケ分からないですよ、僕にとっては。マヨネーズ入って、キュウリ入って、ニンジン入って、食ってみたらなんか甘い！と。心臓バクバクするくらい。よくこんなんって思うけど、秋田の人は美味しいといって食べてるし。これは一人の秋田の母さんが作ってくれた寒天ですけど、こういうのもこの写真のようにキレイに撮ってみせれば、「とらや」で一個 200 円くらいで売っていても買いそうでしょ。「せきや」でバーンって、なんか大量に買うのとはまた違うわけですよ。そういうのも含めて僕には、編集なんです。 だから僕は、**既にこの街にあるものに対して、もう少し「編集」っていう視点でどんどんアプローチしたときに、もっと人が寄るし、もっといろんなものが生まれる**し…というようなことを、まずは根本的にやりたいと思っているし、そういうことを秋田市はやるべきだと思う。 というので、その芸術祭というようなことが先に立つよりも、もっとやるべきことってあるんじゃないの？…っていう疑問を最後に投げかけて、よそ者の勝手な僕は終わろうかと思います。
石倉	ありがとうございます。いよいよ、「本当にやるべきことは何か」、「芸術祭が本当に必要なのか」というポイントに入ってきましたね。「芸術祭？」の「クエスチョンマーク」のするどいエッジが効いてきました。
藤	正にそうですよね。 逆に言うと、それが芸術祭になればいいんですけどね。
石倉	藤本さんには、**編集やデザインの視点から、秋田市が「アート」をメインに据えたお祭り、芸術祭を計画することに対して鋭い、根本的な疑問**も投げ掛けていただきました。その辺りは後半に引き続き議論を続けましょう。一方で、秋**田県内にはこんなに面白い人がいる、こんなに資源が豊富だ**、という話題も出てきました。実際、いまご登壇いただいた三人のスピーカーを見ても、秋田にこんなに面白い活動をしている人がいるんだ、ということが伝わると思います。 次に、前半最後になりますが、「芸術祭？」というプロジェクトについて、秋田市がどういうことを期待しているのか、何を考えているのか、何を計画しているのかを簡単に説明していただいて、休憩に入りたいと思います。
藤	休憩の間に、質問とかを書いてもらったりして後半に繋げたいと思いますので、いろいろ突っ込みどころを、お願いします。

斎藤	秋田市企画調整課の齋藤と申します。今日は寒い中ご来場ありがとうございます。これから皆さんに「あきた芸術祭」のイメージをお話しします。 この「あきた芸術祭」については、昨年、秋田市が美術に関係する三人の外部委員も含め、そして様々な事例研究をした結果、**地域の創造とか都市の再生**ということをコンセプトにしたらいいのではないかという形でまとまりました。 秋田市としては、準備期間をある程度設けて、**平成 32 年度に第 1 回を開催することを目標**として昨年度から今年にかけて検討しているところです。そして、藤先生が冒頭でおっしゃられた 3 年に 1 回のトリエンナーレ方式で、前年にプレイベントを開催して、本番に繋げながらやりたいと考えております。 ただ前半のパネリストの方々のお話を聞いていますと、やはり**「なぜやるのか」「どういうことを目指してやるのか」**という、いろいろな**課題**があります。これについては、二つの目的、視点で整理しています。それは**「世界に向けて」と「市民に向けて」**です。非常に大きなものですが、2 つの切り口に分けて、何のためにやるのかを考えています。 藤本さんとか、パネリストの方がおっしゃいましたが、**地元にある資源を編集する、自分たちにはこういうものがあるんだよということを知る**、ということでいくと「市民に向けて」ということで、いろいろなまちの誇りとか、場所の力を再発見するような目的・コンセプトがあるのではないか、それが私たち市民、県民に根付けば、より豊かな楽しいまちになるのではないかと思ったところです。 秋田市は、**暮らしの中で豊かさを感じられるまち**というのを、総合計画にあげていますので、そういう一つのツール、一つのきっかけになればという視点があります。 その先にいろいろな地域資源が見えてくれば、秋田市としてどういうイメージを作るのか、外に何を発信していくのかという、もう一つの大きい目的も見えてくるのではないかと思います。 それでは、これから休憩になりますが、前半のパネリストの皆さんのお話を聞いて「これを是非聞きたい」という方は、お渡ししてある質問票に書いてスタッフにお渡しください。 後半は、皆さんからのご質問、ご意見を踏まえた自由な意見交換にしたいと思います。よろしくお願いします。

「休憩」（19:50～20:00）

休憩時間中に会場にお集まりの参加者の皆さんからご質問やご意見をお受けしました。トークセッションに入る前にご紹介します。

1	旧県立美術館の活用はどのようにお考えですか。思い切って「秋田の行事」をもとの場所に戻すのは？（無理かとは思いますが）
2	市民自身が歴史や文化を知っていないし、知っていてもそこに着眼しない（興味を持たない）という問題があると思います。
3	「先進的な都市」のイメージ構築について、「先進的な都市」のイメージを具体的にお聞かせください。
4	秋田にとっての「芸術」って何ですか？誰があきたを豊醸にするのでしょう？
5	うまく言えないのですが、まちの魅力や場所の力を地元の人々が再発見、再評価するのは、他所の誰かに認められることでそう感じるものでしょうか？そうでなければ気づけないとすれば、住んでいる人間として悲しいような。
6	（美術館等の展示スペースの）スポットライトを増やして欲しいです。秋田に住んで卒業してからも秋田で作家活動を続けていく者として、秋田市から離れても楽しくて外から人を招ける寂しくない事業展開があればいいなと思っています。
7	「芸術祭」ということですが、結局のところ「芸術」「アート」とは、何のことを言うのでしょうか？皆さん同じものを今イメージしていらっしゃるでしょうか？
8	藤先生が言われたように、全国で芸術祭が乱立していますが、地元の人の写真、地域の物をアートとしているものも多く見られます。地元の方々は喜びますし、楽しいですが、芸術作品の質は世界にPRできるものなのか少し疑問に思うこともあります。地元の人が地元だけで楽しむ。それだけでは終わらないためにはどうしたよいか考えてしまいます。
9	世界に向けた本市の魅力発信、先進的な都市のイメージ確立の2つから、秋田市のみの都市イメージの確立を図るのか？それとも秋田全体の都市イメージの確立を図るのか？もし後者だとすれば、秋田らしさがなくなってしまうのでは。また「都市」のイメージはどんなものか？

10	市民に向けて、秋田市全域で歴史・文化・人の再価値化、発見する仕掛けを日常的に行う。地域年間行事の中でアートにつながるシーズを市民から育てる意識を作らないと芸術祭につながらない。
11	自治体の全面協力のもと、まちなかが展示会場となると、普段の生活でアートを感じられるのではないでしょうか？秋田駅での木材の展示など。
12	今度秋田に文化施設を作るとの話がありましたが、どういったのが使い勝手が良いと思いますか？
13	あきた芸術祭の開催に賛成ですが、これまでのプロジェクトを見ていると、東京や他の地方のまねのようなものが多い事を、携わる人が同じせいか、みな同じように見える。もっと秋田に住む人が知恵を絞って生活の中から生まれた個性あふれるイベントが欲しい。私達は、土方巽の病める舞姫の解読をしているが、秋田の負や暗い日常を描かれているのか感動を覚える。きびしさ、わびしさ、苦しさ、哀しみを乗り越える中に深い感動がある。是非土方巽を真正面から検証していただきたい。
14	秋田に芸術祭を！というテーマのお話が気になり、本日お話を伺いに来ました。私が秋田に来た8年前くらいだったら賛成賛成大賛成だったのですが、今、いろいろなことが見えてきて、「内容は？テーマは？」と一つ一つひっかかるようになってきました。一つには、芸術祭はたくさんあり、県内にもゼロダテやKAMIKOANIPROJECTがあり、もうお腹いっぱいなのではないかと思うこと、また一つには、今ある行事・お祭りを維持するのに頑張っている人達の世代交代がうまくいくかどうか心配で、芸術祭を立ち上げるより、今あるお祭りや行事の価値を再認識し、次世代へ引き継ぐシステムを作ることが大事なのではないかと思い始めたからです。あと、愛知トリエンナーレの鳥に関する問題やこの間の火事のような安全面や倫理面いろいろなことを考えて、やるなら楽しい芸術祭にしてほしいです。
15	私達「作り側」にとっては、あきたの芸術祭はよいチャンスとなるのでやるべきというかやりたい。しかし、「見る側」のただの市民にとっては、興味が無いのでにぎわいにはつながらないと思う。私達の生活、日常に直接的に関わる芸術祭をつくるべきだ。そうすれば秋田の芸術運動につながる、そして秋田でつくりあげる人が増えるのではと思う。もし、開催するのであれば、3年に1度のトリエンナーレより2年に1度のビエンナーレを選ぶべきではないかと私は思う。
16	どうやって市民参加？せっかくそろった市民サービスセンターをそれぞれうまく使えないか？エイジフレンドリーとか他の取組もつなげられないか？

17	僕は「魅力」という言葉を聞くと嫌気を感じます。僕の中では「魅力＝楽しくないこと」だから。今まで、魅力、魅力と頑張ってきたと思いますが、それにみんな本当に魅力を感じているでしょうか？もう「魅力」という言葉を使うのはやめませんか？「魅力」と使いたいところを具体的に「楽しい」ということで、その文章に違和感が出るなら出ろ。人を動かすのは「楽しい」「おいしい」「おしゃれ」です。

「トーク・セッション」（20:00～20:40）

後半は、前半のパネリストの発表や会場からのご意見やご質問を受けて、パネリストに司会・進行役の藤先生、石倉先生も加わって「あきた芸術祭（？）」について議論をしました。

美術家
藤　浩志　氏

人類学者
石倉　敏明　氏

アドボカシープランナー
佐藤　裕之　氏

のんびり編集長
藤本　智士　氏

美術史家
山本　丈志　氏

石倉	続々と、ご意見・ご質問がきています。ありがとうございます。
藤	本当は19時半までに前半を終わる予定だったのですが、皆さんのお話も面白かったので、若干、時間が押しています。それでは、さっそく後半に入りましょう。
石倉	いくつかの質問をまとめながら、パネリストのみなさんにお話を伺っていきたいと思います。まず、「前提として芸術とかアートというのは何を指しているのでしょうか」という質問がいくつか出ていますが、これについてはいかがでしょうか？
藤	「芸術祭」とか「アート」と言うと、どうしても「なんだろう？」ってなじめない人や構えてしまう人、すごく好きな人もいます。アートについての体験は様々ですから、皆さん全く違うイメージを持っています。例えば、美術大学で学生が 100 人いれば、100 人が全然違う価値観を持っていますし、それぞれ全然違うものを作ろうとしている。 それでいいと思っています。その上で、美術や芸術について語るとき、前半にアドボカシープランナーの佐藤裕之さんが述べた「スポーツ」の中にヒントがあるように思います。日常の生活とは何か全然違う非日常、日常を超えた超日常の感覚がすごく大切で、**心がどれだけ震えるのかということが重要**だと思っています。先ほど体を育てる体育の話が出ていましたけども、精神とか感情とか感覚とか心とか、そのような感性も育てなければなりません。教育の中では身体や頭脳を育てるプログラムはたくさんあるのですが、感情や感覚、精神や心も含め、感性を磨き、育てるプログラムは乏しいと感じています。 **まだ見たことがない面白い世界に出会いたい** 日常生活の中で文化芸術の話になると「私は分からないから」とか「苦手です」とか感覚を使うことに関して拒否反応を示す人がたくさんいます。好き、嫌いの感覚を言葉に出せばそれでいいのですが、それができない人が多いんです。大阪人って意外と「これええやん」、「あかんやん」、「おもろいな」って、すごく価値観を持って発言できる人が多いように思うんですが、どうですか。
藤本	独特な物差しと言うんでしょうか、すごく確固たるものがあるように思います。面白いか面白くないかっていう…。
藤	僕は京都の美術大学で学んだんですけど、関西の作家は、この「おもろいやん」という価値観に支えられているように思います。逆に面白くないものを作ったら、家族からも、おばちゃんからも、おっちゃんからも、絶対に総スカンを食う。絶対に「おもろいやん」と言わせなければならない。「おもろい」というのは、ただ単におかしいとか、面白いという普通の意味ではなく、独自の価値観だと思うんです。その尺度を生活の中

	でそれぞれが持っていることがすごく重要なことだと思っています。 「私には分からない」と言ってしまう理由は、美術や芸術についての教育の問題が大きいと思うんです。作品を「わかる」ための授業や試験を受けてきたトラウマがあるからでしょうけど、**現実に必要なのは、そのような作品に対する「知識」ではなく、日常の中で「感覚」を発揮すること**だと思っています。企業経営などにも必要だと思いますが、日常生活の中でも「感覚」を発揮しなければならない場面がたくさんあります。自分の感性からくる価値観をもって判断できるかどうかがすごく重要だと思うんです。 さっき山本さんが立場の話をされましたね。立場でなかなか言えないことがある。立場主義になることが多いんですよ。しかし、**立場に縛られることなく個人の感覚を大切にしながら立ち上がる活動全般がアートに関わってくる**と思います。それは必ずしも過去の絵画彫刻といわれた美術作品ではないかもしれません。さっき藤本さんが言ったイチジクでやったイベントがありますが、あれが全然違う形である価値を生んでいくことなるとすれば、すごく心震える状態を作れるわけですから、それは一つのアートイベントとも言えるかもしれません。
藤本	僕は、「アート」とか「編集」とか「デザイン」って、ものすごく便利な言葉だと思ってるんです。僕は「編集者」という肩書だから、「街を編集する」みたいな言い方をしたりとか、一方で「街をデザインする」とか言ったりします。だからその「アート」っていうのも、ある意味得体のしれないものであって、「編集」っていうのも一緒で、**デザインも編集もアートも確固たる定理みたいなものはなくていい**と思っているんです。 藤さんの話を聞いて一つ思ったのは、「わからない」を肯定したらいいんじゃないかということで、「わからへんわ！」ってあまり言わないでしょ？秋田の人は特に。大阪人は「なんなん、わからへん！」って普通に言うんですよ。「意味わからへんわ、こんなん」って、すぐ言うんです。それだって感想だし、そういう「分からない」ということも含めて自分の感情を認めてくれたら、それはある種、藤さんが仰った「心が動く」とか「震える」みたいなことでもあるんじゃないかなと思います。
石倉	特にアートっていうと、なんだか強制的にわからなきゃいけない、みたいな雰囲気が醸し出されたりしますね。美術大学や美術館も「わからないの？」みたいに、ちょっとお高くとまったふうに見えてしまうかもしれない。 けれども、「わからない」は意識のレベルであって、面白いとか、心が震えるというのはもっと無意識的な出来事です。たとえば、「わからないけど面白い」ってことはありますよね？その反対に、「わかるんだけどぜんぜん面白くない」ってことだって、よくあります。

藤	「アート」とは何かって既定しなくてもいいかもしれないですね。豊醸化の「醸す」という意味で言うと、沸々沸々したもの、得体の知れないものにこそ価値がある場合もあります。将来何に化けるか分からないし、10年後、20年後に新たな価値が発生することだってあります。でも、そういうものを育てていかないと、10年後、20年後の新しい風景は出てこないんじゃないかなと思います。 そういう意味で言うと「アートとは何か」というのを決めつけて、それ他を否定するということではなく、まだ理解できない新しいものが沸々と出てくる状況をどのように作って行くかということが大切だと思います。**まだ見たことがない、出会ったことがない世界と向き合うことがアートの面白さ**なのだと思います。 実は、僕は「アート否定派」なんです、アート糞くらえ派。過去においてアートと呼ばれて価値化されたものは時として力を持っていますが、これから登場するアートは何も力を持っていないものです。ですから過去のアートに騙されないようにして、むしろ、現在はアートと呼ばれていないような些細な感情に注目する必要があると思うんです。妙な言い方になりますが、作る側の立場としては、アートを追っかけちゃうとアーティストになれないんですよ。過去のアートを追っかける人は、アーティストになれない。だって新しいものを作っているわけではないですから。逆に得体のしれないものに取り組んでいって、まだ見たことがない世界に出ようとする人が、アーティストと呼ばれるようになる。別にアーティストにならなくてもいいのですが、まだ見たことがない面白い世界に出会いたいんだと思います。
石倉	アートを追いかけようとしたって、捕まえられない。それは僕も同感です。それなら「アートとは、これから作っていくものである」っていうことは、少なくとも共有できるんじゃないかな？**「何がアートか」ということは、本当は大学の教員や、県庁職員や、市議会議員や、雑誌の編集長みたいな人が決めるんじゃなくて、そこに住んでいる人や外から来た人たちが、一緒に作っていくもの**です。要するに、**アートは、我々が経験し、みんなで作っていく生々しい世界の現実と深く繋がっている。**また、無意識的に心を震わせる仕掛けや作品も、アートという基準と深く繋がっている。そう言えるのではないかな、と思います。
藤	行政が関わるとどうしても「仕組み」を作らざるをえなくなる。皆さんがどうやれば、様々な活動を作り広げることができるかを考えて、その「仕組み」を作ろうとする。そうするとどうしても大きい視点からフレームを作ろうとするんですが、今日の発表にあったイチジクとか、池田修三とか、スポーツとか、マラソンとか、実際には一つのすごく些細な種、魅力的な種を育てていくことで、実はその周辺に魅力的な状況が育ってくる。そこが「豊醸化」のすごく重要なところなのではないかと思うのです。
石倉	上から与えられるのではないやり方でしょうか？

藤	そうですね、いろんな人が主体になって、様々な魅力が沸々と芽吹いてくるところが良いと思うんです。
佐藤	先ほど藤本さんが仰いましたけど、「こうしなきゃいけないぞ」みたいなレジュメを書いちゃうとできなくなる時があるんですよ。行政と一緒にやったりするとそういうことが結構あって…視点が大きくなってしまって「組織つくらないとできません」になるんだけど、意外と物事って「じゃあ、やってしまおうか」といってやった方が、実はすごく上手くいったりするんです。だから「あんまりレジュメ書いたりするなよ」というようなことを時々言うんですけど、そういうことの方がいいんじゃないかなって思うんですよね。
藤本	大前提として、やっぱり「個」の方がすごいと思うんですよ、僕は。「個人」とか「個」が。当然、いろんなことをやっていくと組織になっていくわけじゃないですか。大きな物事をいきなり動かしていこうと思ったら、もちろん組織として動かしていくという方向になるんだけども、どこかで僕は自分の基本的な精神としては**「個」を尊重したい**。「個」をリスペクトしてるんですよ。
石倉	先ほど山本さんから行政が主催した「アキタミュージックフェスティバル」の話が出ましたが、今年はそれとは別に、ミュージシャンの高橋優さんが個人で「秋田 CARAVAN MUSIC FES 2016」を開催しました。高橋優さんは有名なアーティストだけれど、あくまでも「個」を軸に、賛同するアーティストたちを秋田に呼んで、やりたい企画を本当に実現させちゃった。 山本さんが挙げた「アキタミュージックフェスティバル」のほうは、アマチュアの人たちが出演できる音楽祭です。秋田には他にも廃校を会場とした「廃校フェス」とか「上小阿仁音楽散歩」とか、いろんな音楽の場所が生まれています。
藤本	だから、やっぱり、それぞれの志向だったりがあるわけで、「秋田ミュージックフェスティバルは違います」とかっていう話じゃないじゃないですか。それはそれであって、「個」のものも必要だと思うんです。 僕は自分のスタンスとしてはそっちの方が魅力的だったり、編集者だから多分そうだと思うんですけど、既に手入れされているものだったりとか、既に評価されているものだったりとか、そういうものを取り上げていくよりは、まだ誰も目をつけていないところとか、ついついそういうところを考えていくので、組織化されて既に共有されているものよりも、「個」のものを大事にしたい。すごいヤツがいるんだよ、って、そんな感じのモノが大事だと思うんです。
藤	結局、**「個人」と「個人」の繋がり**なんですよね。この人とこの人の繋がりとか、このモノとこの人の繋がりとか。そこからだんだん連鎖して広がっていくみたいなことが大事だと思うんです。菌が発酵していってるような状態のようなものですが。

藤本	こういう「アートフェスティバル」ってなって「秋田市です」ってなったときに、相手が「個」じゃないじゃないですか。だから、「これどういう目的でやるんですか」ってみんな聞きたいじゃないですか。どういう意図でやるのかっていうのは、本来、個人に聞くべき質問なんですよ。だからその質問に対して穂積市長とかが「こうやねん」って話すならまだしもっていうのがあるんです。だけどここに来ていないじゃないですか。 **いったい誰が何をやりたいのか** だから、この取組は**いったい誰がやりたいと言ってるのか、いったい誰の情熱なのか**ということを、すごく知りたいんです。そのことに対して熱量があれば、そこを応援したいし、そこに共感する、というのが、僕はすごくシンプルで大切だと思うんです。
藤	そこなんですよね、本当は。行政でも、担当者がすごい熱量を持っていてやりたいと思っているからあらゆることが動いていくんだけども、でもそこで「私がやりたいからやってるんです」って言えない立場があるんでしょうね。行政職員として動いているわけですから。個人的にやりたいから動いている風にはできないんだろうし、そこの難しさはあるんじゃないかって思いますよね。
石倉	最初の方で「予算ありき」への疑問を藤本さんが指摘してくれていましたね。行政主導であるだけじゃなくて、自分たちで地域社会や経済を作っていくっていう自治のセンスがないとアートというものは実現できないと思います。それがないと、ただ「助成金や税金の使い道のひとつ」という話になってしまいます。下手すると、誰も熱量を持ってやりたくないのに、なんとなく「芸術祭をやらなければ」という空気だけが醸し出されていってしまう。
藤	次の質問で「**地元の人が地元だけで楽しむ、それだけで終わらないためにはどうしたら良いのか**」というのもあります。そうやって地元で面白さが繋がっていくのは理想ですが、それを外にどういう風に伝えるのか。その辺はどうでしょう？
山本	今のお話を聞いていて思ったのですが、「アート」ということを、いわゆる「現代アート」が一番端的だと思うんですけども、やっぱり「分からない」と言われる方が多いんですね。でも、多分学芸員もほとんどわかってないと思うんですよ。**私自身も分からないことは非常に多くて、だから興味を持つのであって、だから見たい、だから知りたいと思うんですよ。そういう気持ちや感じを大事にしたい**というのは学芸員としてあるのですが、どうもそれがかみ合わない状況で進んでいる感じがあるというか。それは美術館がやる展覧会もそうですし、アートイベントそのものがどこか、

	それを享受する人たちと遊離した状態で二転三転して進んでるような印象を受けることが多々あります。
藤	「誰が何をやりたいのか」を明確に外に出すことが重要ということでしょうか。最近はキュレーターやディレクターを立てるやり方も増えてきましたね。
石倉	藤本さんが言うように、「個」を出すことで初めて責任感や信頼関係が見えてくると思うんです。たとえば「山本丈志さん」というキュレーターの顔が見えてくることで、美大生が若手アーティスト支援事業に応募し、秋田在住のアーティストが展覧会企画に参加したりできるようになる。でも、他の大多数が役割のなかに埋没していると、特定の「個」にばかり仕事が集中してしまう。孤軍奮闘する状況になってしまいますよね。秋田にはそういう大きな問題があると思います。 もうひとつの問題として、公共の文化施設や展示環境、というハードの問題もあると思います。これには市街地とアートの関係を最適化するゾーンプランニングも深く関わってきます。アンケートの中に「今ある文化施設をどうしましょうか」「旧県立美術館をどう活用しましょうか」というものがいくつか出ています。中には「藤田嗣治の《秋田の行事》を、思いきって元の旧秋田県立美術館に戻すのはどうでしょうか？」という大胆な提案もありました。いかがでしょうか？
藤本	大賛成ですね、そんなカッコイイことはないですよね。 以前、道路にしちゃった河をもう一回掘り起こすみたいなことあったと思うんですが、ああいうようなことに近いかもしれないけど、「やっぱり間違ってました」って言えるってカッコよくないですか。僕は何であんなものが建ったのかよくわからないですね。
藤	「間違ってました」とは、なかなか立場で言えない。 「こっちの方がもっといいでしょ」っていう言い方はありでしょうけど。
藤本	「なかいち」とか、あれは誰が責任とるんですか、と思うんですよ。あんな入れ替わり立ち替わり…あんなところ人来ないよなと。でも、誰も責任を取らないっていう、この本当に日本の政治みたいなものが、この秋田には渦巻いてるんですよね。
石倉	そう言う意味では、まさに日本の縮図ですよね。魅力も矛盾もあるけど、ローカルな政治の捻れが、余計な悪循環を生んだりもしている。しかし、**本当に芸術的な価値を地元から立ち上げるためには、目の前でフリーズした矛盾や捻れを突破しないと前に進めない。**
藤本	やっぱり「誰が責任者やねん」みたいな、「店長呼べ！」みたいなものが、もうちょっとあってもいいと思うし、僕にとって旧県美はやっぱり「フジタの絵」っていうのは、な

	んか逸話から入ってるんですよ。平野さんとのやり取りみたいな。その、「世界一の絵描きやったら世界一の絵書いてみろ」とか、そういうところのやりとりやストーリーとか、「何十時間で描きました」みたいなのとか。こんなデカイ絵を描く人はいるかもしれないけど、このスピードで描いたのは俺しかいないっていって、その時間をそこに書いてあるとか。最初に平野さんに「どれぐらいの絵の具がいるねん」って言われて、「これくらい要る」と言って、それ全部用意したるって。で、絵を描き終ってから見に行ったら、ホンマに白い絵の具が半分しか残ってなかったとか。それくらい最初に描こうとしている絵のイメージができてた、とかね。なんかそういう逸話があって、あそこで見られたというのは、僕はぎりぎり移転の前に見れてるから余計に思い入れもあるんです。その絵を新しい美術館から元の美術館に戻すっていうのはいろいろ現実問題として難しいこともあるだろうけども、カッコイイなぁと思うんです。
石倉	いっそ、《秋田の行事》の返還を、芸術祭のメインの「行事」にするというアイデアはどうでしょう？（笑）　秋田の文化行政についてまわってきた県と市の長年の縺れを、根本から乗り越えるためにも。
藤本	いや本当にね、それこそ行列できるんじゃないかな。
石倉	「刈和野の大綱引き」みたいな行事にしたほうがいいかもしれません。
藤	三年に一回に戻る。また戻す。全部戻す。
佐藤	御開帳ね。
石倉	作品をどっちの美術館に置くかも綱引きで決める、という手もありますよ。新屋衆と土崎衆の綱引きのように、双方が気合いを入れてね。
藤本	秋田と岩手や山形とかで県境を決めるとかの綱引きがあるじゃないですか、あれみたいに勝った方が県美です、と。
石倉	「お祭り」ってある意味そういう大胆さを含んでいると思います。「神様」のように少し離れた視点から、世俗の捻れを乗り越えていく発想。秋田にも、世俗的・党派的な政治のボーダーを超えていく視点が必要だと思います。
藤	お祭りの質問もありましたね。 「今あるお祭りの行事の価値を再確認して次世代に引き継ぐシステムを作ることが大事ではないでしょうか」という質問が来てます。
藤本	そのこと、僕すごく言いたいことあるんですけど、この前も大館で「新・秋田の行事」とかやったでしょ？ホンマやらんといて欲しいんです、あんなこと。観光客目線で思うんですけど、竿灯祭りは8月の竿燈大通りでウワーッとなって、「あ、稲穂なんや」とか、そういうのがすごくいいのに。

	ただ、国文祭のときはすごく良いなって思ったんですよ。そういうタイミングで今秋田県の人が一つになって、改めて周りの民俗芸能、祭りみたいなことを再確認しようよっていうのは、すごくいいタイミングだったなって思うんですけど、その後やたらといろんなところで竿灯あげられたり、だんだん価値が下がるというか、もうそういうのは本当にやめて欲しい。
石倉	今年の夏、能代の山間部に行って、川に柳の枝を流す「ねぶり流し」の古い形を見てきたんですね。僕としては、派手な観光行事よりも、そういう小さな「祭事」の方が面白いし、ずっと大事だと思うのです。「行事」というのは、余興やアクロバティックな芸能の部分。たしかにそれはそれで大事なんです。でも、暮らしの中に根付いた、厳粛で優しい「ねぶり流し」という祭事があるからこそ、遊びが引き立つんです。本来の祭りから竿燈の妙技だけを引き剥がして、秋田を活性化しようしても、成功するわけがない。命懸けで技を競い合う差し手たちの心は、かつては飢餓や病を川に流し去る「ねぶり流し」に向けられていました。信仰と遊び、この両方がないとお祭りにならないのです。芸術祭も、結局この主題を継承して、別の形で反復することになります。**派手なパフォーマンスだけを観光目的で拡張しようとすると、必ず失敗します。**
佐藤	やっぱり祭りの底辺には、伝統文化とか歴史とか生活があって、それを抜きにしてどっかに持っていっちゃったら、やっぱりヨソモノの祭りになっちゃって… **本来やるべきところとか、これはここで見るべきモノだとか、説明できない「べき」みたいなものを蔑ろにすると、価値が下がってしまう。** 寺に行って仏像を拝みますよね。一応、座るところが決まっているわけです。あれはちゃんと目線が合うようになっているんですよ。あれをガラスケースに入れて東京国立博物館に入れたら宗教的な仏像じゃなくなるんですよね。モノ、あるいは骨董になる。その場所に行かなきゃ見られないものみたいなのに、もっとこだわるべきだと思う。 インバウンドがどうのこうのとか、秋田発信とかいう話をするんだけど、きりたんぽを東京で、美味いもの出して、みんな頑張ってますよっていうのをやめようって話があって、こっち来なきゃ本物食えないんだぞと言う方がいいんじゃないかとか。そういうことを考えると、アート、芸術祭にもいろんな視点が出てくるなと思ってるんです。
藤	今日の話は美術や展覧会寄りになってしまいましたが、本当に「そこにあるべきものごと」ということを大切に作って行かなければならないのだと思います。ここの蔵でしか熟成できないものがありますし、海岸や山でしか熟成できないものもある。あるエリアでは、そこでしかできないものがある。 美術館とか博物館での展示は、便宜上切り取って再編集してみせるショーケース的なものにしかならないんだと思うのですが、展覧会という手法じゃなくて、**様々な現**

	場でプロジェクトをつくる視点をもつと様々な可能性が見えてきます。そのフレームをどう作るのかっていうとこなのだと思います。芸術祭というとお祭り的な感じになるけど、それをずっと熟成させるプロセスを思うと、それぞれの日常の時間に反映してくるし、プロセス自体をどう作っていくのかという課題が見えてくると思うんです。
藤本	本当にすごくシンプルで、今仰ったことはその通りだと思うんですけど、**「芸術祭」って言うからやっぱりあかんねん。**
藤	そこなんですね。そこをやっぱり編集者と一緒に、まず言葉を作っていかなきゃいけない。
石倉	まず、「芸術祭」は本当に「祭り」なんだろうか、という問題があります。ハレとケ、日常とお祭りって違いますよね。さっきの佐藤さんのお話でも、日常と非日常、両方あるからバランスが取れるんだと思います。美術館やアーティストの支援制度など、日常の文化行政を問い直さないまま、非日常のお祭りを始めるのは難しい。日本各地で起こっているのは、じつは「芸術祭」の後に待っている日常との対峙という問題ですしね。「芸術祭」と言った瞬間に、「祭り」のメタファーが立ち上がってしまう。
藤	京都では芸術祭と言わず「超京都」と呼んだりしてますね。
石倉	岡山では「岡山芸術交流 Okayama Art Summit」というプロジェクトが始まっていますね。
藤	呼び名だけの問題でもないのですが、**呼び名で意識は変わっていく**から、そこは本当に考えなきゃいけない。
藤本	ぶっちゃけ、オワコン（終わったコンテンツ）感あるじゃないですか、アートフェスって**…**
石倉	そう思います。質問で、「秋田市が掲げている『先進的な都市』のイメージ構築について」というのがあるのですが、「先進的」ってもちろん、まだ誰もやってないってことですもんね。ところが……（笑）。 芸術祭は、いまや飽和状態にあるといわれるくらい、日本中に溢れています。すでにいろんな自治体がやっています。そのタイミングで、秋田市が新たに名乗りを挙げるということ。「先進感」よりも、「後追い感」の方が……。
藤本	恥ずかしくて仕方ないですよ、**今から秋田市で芸術祭やるって、顔まっかっかですよ。**

石倉	単に「イメージ」や「雰囲気」の問題にしてしまわないように。「先進的なイメージ」をめざすのではなく、本当の意味で「先進的な都市」になるためのビジョンが必要ですよね。 ということで、そろそろお時間ですか？
齋藤	会場の関係で、そろそろ終了ということでとても残念なんですが、続きを考えたいと思います。
石倉	では、最後に皆さんからひと言ずつお願いしたいと思います。 今、未来の社会をつくる生態系の一員として、「生産者」、「消費者」だけじゃなく、エネルギーを次世代に廻していく存在としての「醸し手」、「解体者」の存在に光が当てられるようになってきています。自然の生態系の中では、麹菌・乳酸菌・酵母菌みたいな菌類が「醸し手」になって、人間との相互作用で醗酵食品をつくっていく役割を担います。作って消費するだけではなく、眼に見えないところで沸々と現実を変えていく存在です。 眼に見えないレベルから、秋田の地域社会を動かしている今日のパネリストの皆さんは、「醸し手」に当たると思うんですね。つまり、菌類の眼に見えない働きが食べ物を「腐敗」から「醗酵」に変えていくように、「豊醸化」の働きが、次世代の芸術や文化を作っていくと思います。最後に「豊醸化」に向けての提案といいますか、何か未来に向けてのお話を、皆さんにしていただけたら嬉しいです。では佐藤さん、お願いいたします。
佐藤	「何でやるの？」ということだと思うんです。 あんまり考えすぎると四角四面なレジュメになっちゃうんで、何かやってみたいなっていうもの、行政とか民間とかそういうのは別にして、**やりたいやつが小さいことをもっとやってみて、トライ＆エラーで失敗があってもいい**と思うんです。その中で、生き残りそうだね、みんなここにプライド持てそうだね、みたいなことを、みんなで育てていくというプロセスが大事なんだろうなと思います。 日常と非日常というお話をしましたけど、大々的な非日常を盛り上げていくことも必要なのかもしれないけど、一方で、道端をちょっと見たら何か毎日変わっていって、日常の中で小さな変化を発見する喜びというか、それが継続するようなことになって、それが芸術祭のようなことに育っていくようであればいいのかな。 先に結論ありきで、これをやってインバウンドの増大とかを考えているんであれば、もうちょっと考え直した方がいいんじゃないかなと思います。
石倉	ありがとうございます。では山本さん、お願いします。

山本	先ほどからお話を聞いていて、やっぱり居づらいですね。とてもコメントできない話ばっかりで。頭から、もう私が所属する文化振興課に直接関係するお話がチラホラ出ていたので、非常に針のムシロに座っているような感じで話を聞いていました。 私自身が思うのは、**秋田にあるものを大事にするというのがとても大事**だということです。ただ、「醸す」っていう言い方が、私にはちょっと引っかかるんですが、良く言えば「醸す」かもしれないですけど、悪く言えば「腐らせる」ってことですし、他にもっと言い様がないのかなっていうのが正直なところです。 やっぱり、優れた人材…そうなる可能性がある人がたくさんいるのに、上手く使い切れていないのが実情であって、それに対して何かアクションを起こしていくことが、こういうイベントなりプロジェクトなりをやっていくのに重要ではないかと思います。 実際にこれまで展覧会等をやってきて思うことは、そういうのを理解してやってくれている方がなかなかいらっしゃらない。簡単に言うと、今私がここにいることよりも、秋田市には「千秋美術館」という美術館があって、他にも資料館等があって、優秀な学芸員がいるはずなのに、そういう方々の顔が見えないで、秋田市のイベント事業が進んでいくのはどうなのかなっていうことを感じます。これについてはシンポジウムの依頼があった時、お話ししました。実際にそういう方々がいるということをきちんと認識したうえでやっていくべきではないか、それが秋田にある力というものを成長させることになるんじゃないかなと思います。 私は新屋に住んでいるんですけども、新屋のお祭りを少し手伝っていますが、そういうことも周りの人との繋がりの中で生まれていくものなので、それはもう仰る通りだと思います。そういう小さなことを積み上げていくのがとても大事なんです。人がこういう風に集まるのはビッグイベントじゃないとなかなか難しい。そうでもなければ顔も出さない、手も出さないというのが実情かも知れませんが、そういう**日常を大切にしなければ、非日常というお祭りはできないのではないか**と思います。
石倉	ありがとうございます。何かを「醸す」か「腐らせる」かというのは、結局のところ環境次第だと思うんですね。自然界では役目を終えた生物の身体が「腐る」からこそ、分解されて大地に還り、次世代の生命が芽生える。一方で「醸す」というのは、「腐る」のとは別の形で価値（旨味）を増やし、共生種である菌類のエネルギーを上手に循環させていく、という代替プロセスです。酒造もそうですが、秋田はその分野ではトップランナーだと思います。 さて、最後に藤本さん。もう一度、未来に向けてメッセージをお願いします。これからやらなきゃいけないことっていっぱいあると思うんですが。

藤本	まず秋田市という区切りである意味が分からない。秋田県でいいのにな、とか。あとは、「やらない」っていう選択肢もありますよね？それくらいニュートラルに考えれば、その結果やることが生まれるって、すごくいいなと思うので。ちゃんと、**やらないっていう選択肢もあるっていう前提でいろいろ議論できたり、みんなの思いをぶつけられたらいい**と思います。
石倉	ありがとうございます。市と県の問題は重要です。 ほんとうに、「何だかわからないけど、やることだけは決まっている」っていうのと、「やるのかやらないのか、当事者どうしで合意を形成していく」っていうのでは、まったく社会のあり方が変わってきますね。
藤	そう、やりたい人がどれくらい集まるのか、っていうのが重要なところかなって気がしますよね。そこでホントに作っていかないと良いものっていうのはできない。
佐藤	プロデューサーとかキュレーターとか、いろいろ役割があるというお話がありました。イベントとかいろんな活動をやっていると「この事業の責任者は誰ですか」「リーダーは誰ですか」とメディアの方から尋ねられることがよくあります。でも、たまにリーダーを決めないでモノゴトを始めちゃうことがあって、今回そういう人は想定してません、リーダーはいません、と答えるとびっくりされる。でもリーダーがいなくても自然とウワッとできたりする。 そういうのが、「醸す」ってことで、そういうものを大事にしていって、それをいよいよ計画にするみたいな手法は是非取って欲しいなと思います。
石倉	なるほど。名前が付くよりも先に、何らかの自然発生的な「動き」があって、そこにエネルギーが生まれていく。必ずしもリーダーは必要ない、それよりもエネルギーが生まれてくる状況を準備していくことが大切ですね。 我々も、いろんな反省点を取り入れつつ「現実を醸す」ように頑張っていきたいんですけれども、秋田市が構想している芸術祭については、やることありきではなく、何が必要なのか、何ができるのか、というところから、今後も皆さんと一緒に考えていけたらと思っております。もちろん、やらないという選択肢も含めて。本日はありがとうございました。
藤	時間をオーバーしてしまってすみませんでした。 今日話したみたいに、これじゃあダメだろう！という人たち、どんどん集まっていただいて、その方たちと一緒に作って行ければいいと思います。多分まだ先の話になるとは思いますが「芸術祭じゃねえよ。ちゃんと調べていこうよ、ちゃんと見ようよ！」という人たちと一緒に小さい現場から、いろんな苗とか種とか、菌であるとか、ちゃんと探して出会って行きながら、つくる作業につながって行けばいいんじゃないかと思います。今日は本当にありがとうございました。

齋藤	今日は皆さん、長い時間お疲れさまでした。実は話が非常に盛りだくさんでもっと聞いていたいなという気もしたんですが、本日はお時間ということでお許しください。 秋田市としましては、今日のことを「芸術祭？」という風につけまして、芸術祭と呼ばない方がいいんじゃないかとか、いろんなキーワードが出るんじゃないかってことで本当にフリーにお話をしていただいて、とても充実した内容を聴くことができたと思っております。 これから秋田市としても、いろんなご意見を聞いたり検討しながらということで、関わりたい、当事者になりたいという方々を増やしていって意見交換をしたいと思いますので、これから facebook の準備はしていますけれども、例えば「夜学会」だったりとか、そういう形で新たに話し合いや意見交換ができる場を設けていきたいと思っていますので、関心がある方はこれからもお付き合いいただければと思います。 最後になりますが、高清水さま、そしてスタッフの皆さま、会場や機材の提供など、いろいろご協力いただき、ありがとうございました。 そして、改めまして、パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。 それでは、これでシンポジウムを閉じたいと思います。天候が良くない中ですので、お忘れ物ないよう、くれぐれも気を付けてお帰りください。